



# ルーツ

土橋 重治

## 雑賀と根来

中世の末期、今の和歌山市全域は「雑賀」と呼ばれていた。そこに暮らす人々が雑賀衆である。雑賀衆は鉄砲傭兵・地侍（土豪）集団として、根来衆とともに、鉄砲伝来以後はそれぞれ数千挺もの鉄砲で武装して活躍した。

雑賀は五つの地域に分かれていた。中心に位置する「雑賀荘」、土橋はその最北東端紀ノ川右岸に面し、水陸の要所にあった。和泉山脈と紀ノ川右岸河口までの楠見・松江・加太などの「十ヶ郷」、日前宮を中心とした太田・秋月など「宮郷」、安原・山東などの「南郷」、東の方の和佐・吐前などの「中郷」があった。物事を決めたり裁判をする場合、村々の代表が出てきて会議によって決めるという非常に自治的で民主的な運営をしていた。

これをポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、雑賀衆のことを

「ヨーロッパにおいては富裕な農夫と称する如き者」、雑賀の自治を「共和国のようだ」と述べ、軍事・経済面でも、当時紀北・大阪和泉地方で寺領七十万石とも称された「根来に劣らぬ」と言わせている。

当時、根来寺内には十五万坪の敷地に四百五十以上の坊院があり、僧侶五千人以上が居住していた。

雑賀衆の各家から根来寺内に塔頭を建て、一族の者を院主、坊主として入れていた。特に有名な家としては、雑賀荘の土橋氏の泉識坊、中郷の岩橋氏の成徳院、吐前・津田氏の杉ノ坊である。

鉄砲が種子島に伝わった二挺のうち一挺を種子島の領主時堯から譲り受けて根来に持ち帰ったのが杉ノ坊、吐前の津田氏である。

鉄砲は根来から雑賀に持ち込ま

れた。根来・雑賀衆は、このころのようにして大量の鉄砲を調達できたのか、今も明確に分かっていない。

説としては、堺の外国人から移入した、地元で作った、他の地域から職人を招いたなどが言われているが、いずれも推測の域を出ない。火薬の原料となる硝石は日本国内では産出しない。材料や原料を入手するために雑賀は経済的に豊かであり海運も営んでいて、地理的にも優位な位置にあった。

雑賀衆・根来衆は、時には雑賀の各郷・郷中の各家、根来衆の坊院が、それぞれの利害関係・地縁・血縁があって、敵・味方となることもあった。

しかし、おおむね反信長・反秀吉として一致協力、協調・団結して「石山合戦」「信長の紀州攻め」「小牧・長久手の戦い」「秀吉の紀